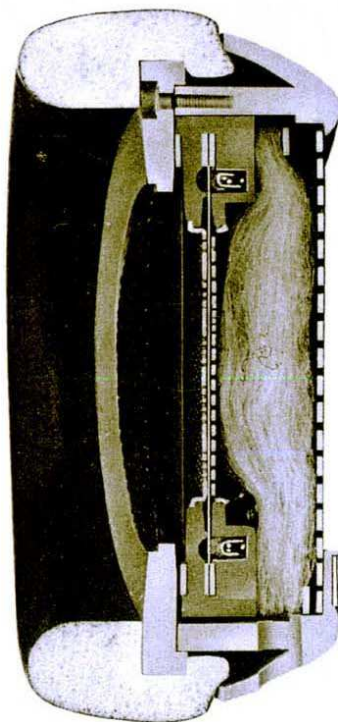
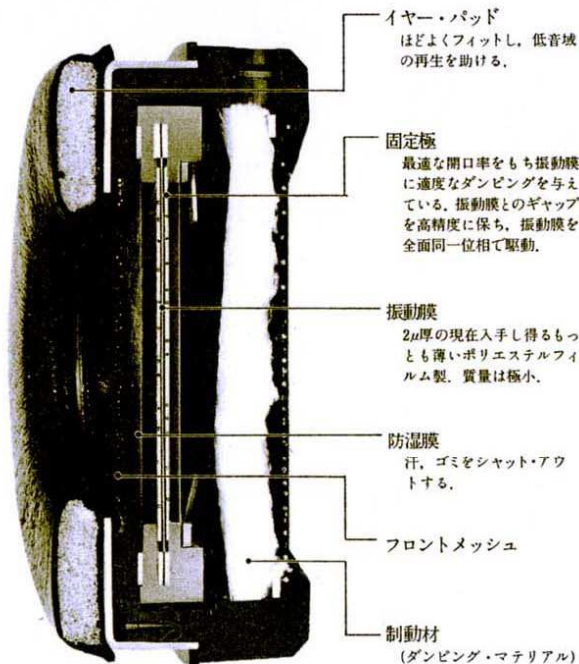


コンデンサー・ヘッドフォン 18年の歴史.



SR-1 (1960)



SR-X/MK.3 (1977)

- イヤー・パッド
ほどよくフィットし、低音域の再生を助ける。
- 固定極
最適な開口率をもち振動膜に適度なダンピングを与えている。振動膜とのギャップを高精度に保ち、振動膜を全同一位相で駆動。
- 振動加膜
2 μ 厚の現在入手し得る最も薄いポリエステルフィルム製。質量は極小。
- 防湿膜
汗、ゴミをシャットアウトする。
- フロントメッシュ
- 制動材
(ダンピング・マテリアル)

世界初のコンデンサー・ヘッドフォンをイヤースピーカーと名づけたのは、その音の自然さ、かけ心地が、まるでヘッドフォンばなれしていたからだということは、ご存知でしょうか？今回は、古い話になりますが、イヤースピーカーが誕生する以前のお話をしましょう。現在ですら、最良の方式といわれるエレクトロスタティック型ヘッドフォンの研究に着手したのは1957年、当時の音の出口といえば、すべて電磁力

のお世話になったものばかりでした。貧弱な再生機器しかなかった20年前に、いかにして情報のロスを減らし、音楽の細部を浮かびださせるかを問題にしていたのですから、困難は推して知るべし、です。駆動原理を根本から変更した報いともいえるでしょうか、不十分な材料を組合わせた試行錯誤のくり返し、手本のない創作の苦しみが続きました。そんな中で、やっと1959年第8回オーディオフェアでのSR-1

の出品にこぎつきました。しかし、多人数の試聴に耐えかね、無事だったのは少数。研究室と「実社会」の差を痛感させられたものでした。そのトラブルの対策、これが防湿膜の開発となったのです。ちなみに当時の防湿膜は、現在でも商品には実在しない1 μ 以下の手製の薄膜。クオリティの点では非常にすぐれたものでした。その他、固定極の大きさ、その開口率、最も大切な振動膜とのギャップ、成極電圧の設定、

また今日、後面開放型といわれている方式の考案やケースの大きさ、パッドの材質、側圧の決定など、数々の問題をひとつひとつ解決。さらに経年変化に対する対策、限りなく続く部分的な改良……コンデンサー・ヘッドフォンの道は、常にスタックス自身で引き拓いてきました。今、あなたの手にする「SR」は、イヤースピーカーの、いや、あらゆるコンデンサー・スピーカーの最高峰です。

★オール・コンデンサー・システムのスタックス

STAX

We Love Our Products

日本ビックアップ工業会・会員
スタックス工業株式会社
東京都豊島区雑司が谷+25-5003(981)7227代千171
☆製品名をご指定の上、R-4係へ
カタログをご請求ください。